

大学生の日本人意識について

— 日本人論, 日本語との関連 —

早矢仕 彩 子¹⁾

1 はじめに

1-1 日本人意識について

「私は…」に続く文章を自由記述させる20答法を用いて自己概念を調査すると、その回答には、自己自身の持つ外面的内面的な様々な特徴を記述するものがあると同時に、「ある集団に属する」ということを自己の特徴として記述する文章が書かれることがしばしばある。自己を規定する場合、社会における自己の立つ位置を明らかにすることによって、自己をより明確にしようとするのである。このように、我々が自己を意識するとき、自己は何の誰某という個人であり、かくかくの特徴を持った人間であるという「個人としての自己」の意識を持つと同時に、自分自身をその一員として含む集団の一部であるという「集団の一員としての自己」の意識をもあわせて持つ。

この、自己が何らかの集団に所属しているという意識、—〇〇家の一員としての自己、〇〇校出身者の一員としての自己、〇〇地方出身者の一員としての自己、〇〇という職業集団の一員としての意識、—などのうち、異文化接触という状況において頻繁に意識されるものに、民族的アイデンティティと呼ばれるものがある。

異文化圏に地理的移動をした際、「自分は日本人である」という意識がしばしば大きく浮かび上がって来ることを、多くの日本人の記述の中に見ることが出来る。「海外へ出るまでは、‘おれは強いて言えば‘人間’だ’としか考えていなかったのに、香港へついでだけで‘お、おれは日本人だったんだ!’と思った。そして自分がすごく退化した気がしたものだ。‘民族性 (ethnicity) は前近代的なもので、世界は民族性を超越した普遍性に向かって前進しているはずだ’という先入観がずたずたにされてしまったのである。”(1994)と、越智は異文化圏で初めて、自己が日本人であることを意識したときのショックを記述している。そして、異文化が日常的に接

触しあっている多文化社会アメリカにおいても、自己の民族性は人々の大きな関心事であることを報告している。また、青木は3年以上にわたるニューヨークでのジャーナリストとしての生活を経たあともなお、“相手の立場ばかりを主張して決して非を認めようとしないうアメリカ人の前で、‘ソーリー’などと口走っている自分を見つけると、たまらなく日本人だと思えてくるのだ”と「習性」として抜き難く根づいている日本人らしさを持った自己を再確認、自己の中の「内なるアメリカ」を見つけるつもりで行ったニューヨークで、“私はいつのまにかアメリカ人という鏡を前にして「わが内なる日本」をみついていた”と述懐している(1988)。

これらはどちらも「自分は日本人である」と意識した体験を述べており、自己を日本人という集団に同一化することによって、民族的アイデンティティを確認した過程であるということができよう。しかし、その意識内容の性質は同じではない。おそらく前者は、一度に大勢の、風貌や話すことばや行動様式の異なる人々に遭遇したことにより、彼らの属する集団が自己が属する集団とは異なったものであるという認識をしたという、いわば「自己の所属集団の確認による民族的アイデンティティの意識」であり、これに対して後者は、自己の持つ思考様式、価値観、行動様式などの文化的特性の確認による、いわば「自己に内在する文化的特性認知による民族的アイデンティティの意識」であるということが出来るだろう。

われわれは、それまであまり意識することのなかった自己の特性を、外国人との対比で強く意識することがある。また、自己の中にある特性を意識したとき、それがたまたま外国人との対比がなされやすい場であり、その特性が自己の持つ日本人概念(ステレオタイプ)に含まれるものであるならば、その特性を持った自己は“日本人らしい”と感じ、日本人らしさを持つ自己は、紛れもなく“日本人である”(日本人的特性を持つ人間集団の一員である)との感覚を強めるのであろう。

次に、自己のいかなる特性を意識し、それを日本人と

1) 三重大学人文学部

いう集団の成員の多くが持つものであると判断したのか、つまり自己の民族的特性認知による民族的アイデンティティの意識を、自己の特性のうちのどのようなものによって得たのかという観点から見たとき、自己の外的側面によるものと自己の内的側面によるものの、2つに大別することが出来ると考えられる。前者は外面的な日本人らしさ、後者は内面的な日本人らしさである。

自己を意識する際に、自己のどのような側面に意識を焦点づけやすいかに関して提出された概念に、Fenigsteinらの私的自己意識 private-selfconsciousness、公的自己意識 public-selfconsciousnessがある(Fenigstein, A., Scheier, M. F. & Buss, A. H. 1975)。このうち私的自己意識は他人からは観察出来ないもの、例えば思考内容、感覚、価値観などについて意識することであり、公的自己意識は、他の誰からも観察されるもの、例えば外見、行動様式などに関して意識することであるとされている。この概念を用いて先のことを表現するならば、自己の特性認知による民族的アイデンティティの感覚を得る過程にも、公的自己意識によるものと私的自己意識によるものがあるということが出来るだろう。

自己の日本人らしさ(日本的特性)を認知して、自己は「日本人である」と意識するまでの心的過程は、次のようなものであろう。すなわち、異文化や外国人との対比が起こりやすい場において、何らかの契機があって自己のある特性を認知したとき、それが自己の持つ日本人概念に近いと認知されたときには、自己がその特性を持つのは日本人であるが故と帰属され、その特性を持つ自己は「日本人である(他の日本人と共通点がある)」と意識するのである。そしてこのような、自己が日本人であると意識する場合も、自己の公的な特性を意識する場合、私的な特性を意識する場合の2つがあると言えるだろう。

1-2 日本人概念の形成

「私は…である」という、ある程度固定した自己についての考えを自己概念とする、との考えにしたがって、「日本人は…である」というような、ある程度固定した自己を含む集団についての概念を、「集団自己概念」と呼ぶことにする。では、我々はどのようにして「日本人集団自己概念」を形成するのであろうか。

自己概念の形成は、まず自己を意識することから始まるが、「他者を意識することが自己を意識すること」という辻(1993)の指摘のように、他者を意識するという過程が伴うときになされやすい。他者との対比の上に自己の姿が明確になり、それによって自己概念が形成され

ていくのである。したがって、日本人と対比される外国人の存在があると、日本人集団自己概念の形成が促進されると言えるだろう。対比によって、日本人というものがより明確に把握されると思われるからである。では、我々の日本人集団自己概念形成に影響していると考えられる外国人との対比機会には、どのようなものがあるのだろうか。

まず第一に考えられるのは、言うまでもなく、外国人との直接体験である。外国人との接触体験が多ければ多いほど、それらの経験を通じて外国人についての情報、例えば外見、行動、コミュニケーション法、性格傾向、思考内容などを知ることが出来るだろう。そして日本人のそれと対比することによって、違いを知る機会が得られ、そこで〇〇人概念が、そして日本人集団自己概念が、それぞれ形成されると考えられる。しかし、対比の対象とする外国人に偏りがあれば、形成された日本人概念は偏ったものとなる可能性はある。一般的には機会を重ねるにしたがって、多数国の、また多種の情報を得て、その概念は強固になったり、修正されていくと考えられる。

第二は、メディア、特にテレビによって伝えられる外国人との対比の機会である。情報の豊富な現代においては、外国からの情報、又は国内の在日外国人についての情報が、簡単に茶の間まで入ってくる。これらは各人の直接体験ではないが、いわば外国人との疑似接触体験と位置づけることが出来るだろう。直接体験に準じた形で外国人の言動を見聞きし、そしてまたそれと対比した形で日本人らしさを意識するような機会が、現代社会では豊富にある。テレビ以外にも、身近な人の体験を聞くことや新聞雑誌などの記事によっても、疑似接触体験は得ることが出来る。

第三は、多くの学者や知識人による日本人論、日本文化論から得られる外国人集団概念又は日本人集団自己概念の取り入れである。著者達の鋭い観察眼、洞察力に基づいた日本人や日本文化に関する指摘は、これまでも多くの日本人に強い印象を与えてきた。読者はそれらの書物から影響を受け、著者の見方に同調し、その理論に依拠するようになる。これら先達の説得力のある見解が、少なからず各個人の日本人集団自己概念に取り入れられ根付いていったであろうことは、近年日本人論ブームと言われるほどこれらの著書が出版され、そのうちいくつかはベストセラーになり、多くの日本人に読まれてきたという事実からも推測できる。国際化と言われる社会情勢の中で、日本人自身の日本人に関する興味の高まりもその背景にあるだろう。

外国人との直接・間接接触の機会が豊富にあり、また

情報のあふれる現代において、われわれ日本人はどのような特性を日本人のものと考えており、自己の中のどのような特性を認知したときに、自己を日本人らしいと感じているのだろうか。また、自己の中にある日本人らしさをどう評価し、どう受け入れるのだろうか。この論文の目的は、日本人若者の民族意識、すなわち「自分は日本人だ」と感じる時に確認する自己の中の「日本人らしさ」とはどのようなものかを明らかにし、その形成について考察することである。

2 日本人の集団自己概念

— 大学生における日本人らしさ、日本人意識に関する調査から

では、実際に我々は日本人らしさ、日本人の特徴（日本人特性）をどのようなものと考えているのか、また実際に日本人を意識するのはどのようなときなのか、これらをまず明らかにしたい。大学生の日本人意識に関する調査結果から、現代学生がどのような日本人らしさについての把握をしているのか、また日本人であることをどのように考えているのか、その実態を報告し、日本人の集団自己概念について考察する。

調査方法：無記名調査法による。日本人の特徴に関しては「あなたは“日本人らしさ”“日本人の特徴”といえどどんなことだと思いますか。下の記入欄に出来るだけたくさん思いっただけ書いてください。」との自由記述を求めた。また、「あなたは普段ご自分が日本人だということを意識していますか。」に対して、いつも意識する、時々意識する、あまり意識しない、ほとんど意識しない、の4段階尺度で回答を求めた。次に「あなたはどんなときに“自分が日本人だ”と意識しますか」、「あなたが“日本人でよかった”と思うのはどんなときですか」、「あなたが“自分は日本人でなければよかった”と思うのはどんなときですか」の3つについても自由記述法で記述を求めた。

調査対象：国立大学理系合同心理学授業の受講生（1年次学生）有効回答数123名

調査時期：平成6年7月中旬

調査結果：

(1) 日本人らしさに関する叙述—日本人集団自己概念

日本人らしさの自由回答は123名中119名から得られ、自由記述の回答数はのべ683であった。これらのうち現代の日本人らしさの意識には直接合致しないと思われる記述（例えばサムライ、ちゃんまげなど）を除き672を分析の対象とした。KJ法により分類したところ表1のごとく10のグループに分類することができ、それにより

① 外見的特性 ② 行動的特性 ③ 表現的特性 ④ 能力的・気質的特性 ⑤ 感覚的・思考的特性 の5つの上位カテゴリー、更に各2の下位カテゴリーを作成した。作成したカテゴリーは表1に示した。また各記述を表1のカテゴリーにしたがって評定した結果が、表2である。なお、評定に際しては文脈を重視し、同形の記述であっても否定的な記述の文脈にあれば否定的態度に、何の態度も示されていないときは中立的態度に評定した。例えば「メガネをかけている」という記述はそれだけでは中立的態度と評定したが、「背が低い」「ハゲ」などの

表1 日本人らしさカテゴリー

1 外見的特性	
11 生物学的特徴	黒髪、黄色皮膚、褐色の瞳、細い目、短躯胴長、扁平顔、など 例 髪が黒い 背が低い
12 文化的特徴	持ち物・服装など（眼鏡、カメラ、ブランド品、など） 例 メガネをかけている 流行の服を着る
2 行動的特性	
21 慣習・生活様式	例 おじぎをする 礼儀正しい 魚を食べる 受験地獄 よく働く 忙しすぎる
22 行動傾向	例 集団行動 上にべこべこ 人にあわせる 意見を言わない 自己主張しない（できない）
3 表現的特性	
31 パーバル表現 言語による表現の違い	例 曖昧である はっきり言わない NOと言えない 表現が下手
32 ノンパーバル表現 特有のしぐさ・表現形式	例 笑ってごまかす にやにや笑う
4 能力的・気質的特性	
41 人種的民族的な能力特性	例 頭がよい 器用である まねがうまい
42 人種的民族的（文化社会的）気質特性	例 内気である 正直である 几帳面 優柔不断 島国根性
5 感覚的・思考的特性	
51 感覚・興味	例 わび・さびがわかる 自然を愛する
52 思考傾向・価値観	例 人目を気にする 上下関係を考える 和を大切にする

表2 日本人らしさ記述数及び態度

カテゴリー		記述数	態 度		
			肯定的	中立 or 不明	否定的
1 外見的特性	11 生物学的特徴	31	0	13	18
	12 文化的特徴	13	0	3	10
2 行動的特性	21 慣習・生活様式	74	15	22	37
	22 行動傾向	98	6	60	32
3 表現的特性	31 パーバル表現	71	3	55	13
	32 ノンパーバル表現	12	0	8	4
4 能力的・気質的特性	41 能力特性	9	3	3	3
	42 気質特性	114	71	64	10
5 感覚的・思考的特性	51 感覚・興味	27	11	0	16
	52 思考傾向・価値観	203	6	153	44
計		683	115	381	187

叙述とともに書かれている場合は否定的態度と評定した。日本人らしさを感じる内容についての結果は、思考傾向・価値観のカテゴリーに分類されるものが203と最多で、ついで気質特性に関するものが145、ついで行動傾向98、慣習・生活様式75、パーバル表現71と続く。思考傾向・価値観に関するものは否定的態度が肯定的態度をはるかに上回り、気質特性に関するものでは肯定、否定が相半ばしている。言語表現に関しては否定的態度13に対して肯定的態度は3であり、中立的態度55の中にも文脈からの断定はできなかったが婉曲的、あいまいなど、どちらかといえば否定的なニュアンスでいわれることの多い記述が多かったことから、いわゆる日本のコミュニケーションに対しては否定的な態度を持つ学生が多いことを示している。外見に関しては明らかに肯定的な態度の記述は全くなく、中立的な態度で事実を述べたものと否定的な態度を示したものが全てである。行動的特性では習慣生活様式では何れの態度も多く、中でも中立的な態度での叙述が多かったが、行動傾向に関しては否定的態度が32であり、中立的と評定されたもののなかにもどちらかといえば否定的に傾くものが多く、肯定的態度での叙述は6のみである。

(2) 日本人であることに関する意識

① 意識の頻度

「あなたは普段、ご自分が日本人だということを意識していますか」という質問に対する回答は表3の通りであり、あまり意識しない、ほとんど意識しない者が63名、いつも意識する、ときどき意識する者が60と、ほぼ半数ずつであった。

表3 日本人意識頻度別人数

	人数	合計人数
1:ほとんど意識しない	21	63
2:あまり意識しない	42	
3:ときどき意識する	54	60
4:いつも意識する	6	
合計	123	

② 意識の機会

「あなたはどんなとき日本人であることを意識しますか」という問いに対して117名から回答が得られた。わからない2、意識しない2を除く184の回答を分類したものを表4に示した。直接間接に外国人を見たときにその対比として自己を日本人と意識すること、(例、留学生を見たとき、外国人と話すとき など)、外国語や日本語を話すとき日本語を話す民族として日本人を意識すること(例、外国人の前でしどろもどろになっているとき、日本語をfluentに話すときなど)、自己の日本的な外見や行動傾向を認知したとき(例 足が短いと思うとき、鏡を見たとき、団体行動しているとき)など自己の外面的側面を意識する機会に意識するという答えが計62に対して、自己の日本的思考傾向・気質の認知時(例 人のことが気になるとき、優柔不断なとき)47、日本の生活様式・文化・自然などが身についていることの確認時(例 和食をおいしいと思うとき、季節感を感じる時、寺を見て心がなごむとき)54など自己の内的側面を意識する機会に日本人であることを意識する

表4 日本人であることを意識するとき

自己の外的側面を意識するとき	62	
外国人との直接・間接接触時		35
外国語・日本語に関して		15
自己の日本的な外見, 行動傾向認知時		12
自己の内的側面を意識するとき	101	
自己の日本的な思考傾向・気質の認知時		47
日本の生活様式・文化・自然などが身についていることの確認時		54
その他を意識するとき	21	
コミュニケーション様式		4
国全体を意識する時		12
現在の日本の生活感		5
計		184

表5 日本人でよかったと思うとき

	叙述数
治安の良さ・平和であること・戦争がないこと	60
物質的豊かさ, 先進性	33
日本文化が身についていること・良さが分かること	47
日本人の特性, 自然環境の積極的受容	15
その他(日本国民であること, 日本語, 社会の積極的受容)	9
思ったことはない	4
分からない, 無回答	11
計	179

表6 日本人でなければ良かったと思うとき

		叙述数
日本人の特性の意識時	73	
外面的特性		29
内面的特性		39
英語ができないこと, 不利		15
日本の政治社会の欠点, 日本人の悪事の認知時	43	
外国からの批判, 非難を感じる時(政治, 過去の行為)		18
生活様式に関する社会の価値観		13
生活環境 自然環境 社会情勢		12
その他, 意味不明		6
ない		23
計		145

という答えが101, その他21である。

③ 日本人であることをよかったと思うとき（肯定的日本人意識）

治安の良さ・平和であること・戦争がないこと60, 物質的豊かさ・先進性33, と日本社会では平穩無事で物質的に豊かで文明的な日常生活を送ることができることをもっとも評価し, それに満足している。ついで, 日本に生まれ育ったことにより, 日本の生活様式や文化が身についておりその良さが分かることから, それらを行ったり接したりしたときの幸福感により, 自己が日本人であることを確認していることがうかがえる(47)。日本人の特性の良いところ, 自然環境の良さに対する評価がそれに次ぐ。

④ 日本人でなければよかったと感じるとき（否定的日本人意識）

一方否定的日本人意識は, 日本人の特性を考えたとき(外面的特性19, 内面的特性39)に感じるものが最も多かった。また, 英語ができないことに関してのものが15あった。ついで国や国民に対す外国からの否定的評価を感じる時18など, 日本の政治社会の欠点, 日本人の悪事の認知時が43である。

ここで注目すべきは, 日本人で良かったと思うときは, 現在の平和な生活に対する満足感や, 日本文化に慣れ親しんだ自己がその中にあることの安心感が感じられるときが圧倒的に多く, 日本人の特性については, 外面的な面はもとより内面的な面にも, ほとんど肯定的な評価をしたものはないということである。わずかに日本は平和である(日本人は温厚で穏やかだ), 道に迷ったとき安心して人に聞ける, 情緒の感覚に長けていているような気がする, 集団でよく行動することにより仲間意識が芽生えたとき, 礼儀正しい人が多い, 季節感に敏感, 宗教にとらわれてないとき, の7つが認められるのみである。

これに対して日本人でなければ良かったと思うときは, 逆に日本人の特性を認知したときが圧倒的に多く, 内面的な特性について38, 外面的な特性19, 英語が苦手という能力的特性16を加えて実に73がこれに相当し, 述べられた意見の半数以上に及ぶ。

多くの大学生は日本での現在の平和で豊かな生活に満足しており, それを可能にした国家としての日本, その中でもはぐくまれた日本文化に対しては肯定的に評価をしているが, 自己あるいは自己以外の日本人の中に見る日本人の特性に対しては, 圧倒的に否定的な意識を持っていることが分かる。

3 考察

3-1 日本人の否定的集団自己概念について

前述のように, 日本人らしさ, 日本人の特徴についての自由記述は, 否定的なニュアンスを持って, または否定的な文脈の中でなされたものが多かった(表2)。現代大学生における日本人集団自己概念は, 集団理想自己概念との不一致が大きいということができよう。これはまた「日本人でなければ良かったと思うとき」についての自由記述においても, 自己の日本人の特性についての否定的な意識が, 全叙述数の半数にも及んでいたことから裏付けられる。

日本人が持っている国際社会における集団理想自己概念はというと, それは欧米人のそれであるように思われる。「日本人でなければ良かったと思うとき」の設問に対して外面的な特性を述べた19の叙述は, その全てが欧米人と比べていると解釈できるものであった。足が短い, 鼻が低い, 外国人モデルを見たとき, 金髪のきれいな外人さんを見たとき, 金髪で色白で手足の長い外人を見たとき, 欧米人のモデルを見たとき, 運動しているとき(体が大きければいいと思う), 背が低い, 足が短い, スタイルの良い外国人を見たとき, 体力的・体格的に弱いと感じるとき(スポーツ), 洋服が合わないとき, 自分の足の短さに気づいたとき, 自分の外見がよろしくないと思ったとき, アメリカ人を見たとき, 欧米人のスタイルを見たとき, 黄色人種, 足が短くかっこわるい, 身長の高い人が近くにいるとき(欧米の人は普通の身長でも大分高いだろうに)と続く。また内面的な特性に関しても, 例えば自分の意志があってもそれを他人の前で意見として言えないとき, 自分の性格に個性がないと気づくとき, 議論がまとまらないとき(だらだらするとき), 親に甘えるとき, 外国人を必要以上に意識してしまうとき, など一般的に巷で「欧米人に対して日本人は…」と批判的に述べられることの多い事柄に関する叙述が多く, 言外に「欧米人に比して」と解釈できるものが多いのである。

明治の文明開化以来, 日本人の外国に対する目は欧米一辺倒であったことは衆人の認めるところである。明治政府の国策として, 英独仏をはじめとした西欧列強に学び, 追いつくことを至上の課題としてきた中では, 欧米のものが物質はもちろん, 生活様式, 思考様式, 価値観から言語にいたるまで, 高尚なもの, 価値の高いもの, 敬うべきものとして位置づけられて来, その価値の感覚が日本人の中に根づいたことは当然の成りゆきであったろう。第二次大戦後は米国がこの対象となり, 再び欧米一辺倒の時代があった。およそ100年にわたって席卷し

たこの感覚は日本人の中に根をおろし、その後の日本の経済技術の発展による国力の高揚に伴う、青木の言う日本人の歴史的相対性認識の時代、肯定的特殊性認識の時代（青木、1990）を経た現代においてもなお、そのまま持続されているようである。

3-2 日本人意識に大きな影響を与えていると思われる日本人論・日本文化論に関して

第二次大戦後現在まで、夥しい数の日本人論日本文化論に関する書物が出版され、魅力的な様々のキーワードとともに、日本文化・日本人についての知識を一般大衆に与え続けてきた。その書物の数は、“1946年から78年までの単行本だけで698、そのほかに論文やエッセイを加えれば1000点を超えるだろう。また1978年からの10年間の日本人論ブームを考えれば戦後のこれら出版物の数はゆうに2000点は超すのではないか”とされている（青木 1990）ほど膨大な数である。もちろんそれ以前から、特に明治以後第二次大戦までの知識人達による数多くの書物の影響も、見逃すわけにはいかない。

築島はこれまでに出版された日本人論に関して、膨大なレビューを行っている（築島、1984）。鎖国の前の宣教師達による外国人の目に映った日本人についての描写から始まって、江戸時代や明治初期までは、主として外国人達の目に映った日本人についての記録が残っている。明治初期からは外国を見た知識人達の、翻って日本を見たときに見える日本文化や日本人についての著述が加わり、次第にそれが主流になっていく。そして第二次大戦後は、外国人であるベネディクトの「菊と刀」の日本文化論に触発された形で、前記のような膨大な数の日本文化論日本人論が、日本人外国人両方の視点からなされた。築島はこれら戦後の日本文化論日本人論を大きく分けると、日本社会を見ながら日本人を論じたもの、日本語を介して日本人を見たもの、直接日本人の性格や心を論じたもの、外国滞在の経験から比較文化的に日本人を論じたものの4カテゴリーに分けられるとしている。また青木は、戦後の日本文化（人）論は1945-54の否定的特殊性の認識の時代、1955-63の歴史的相対性認識の時代、1964-83の肯定的特殊性認識の時代、1984-の特殊から普遍への時代、の流れがあり、日本文化や日本人をどうとらえるかに、大きく見ると時代とともにこのような変化があるとしている。

築島によると、ポルトガル宣教師の見た日本人から明治大正までの400年間、内外の論者が日本人的特性として述べた共通した見方は、道理に従う、名誉心が強い、礼儀正しい、好奇心が強い、上下の身分差がある、集団性がある、形式主義が強い、自由が弱い、の8つであり、

このうち集団性、形式主義、自由の弱さ以外の5つは、ザビエルの叙述の中に既に見られていたものであること、またこれらは昭和45年の「日本人の性格」で日本人の主要特性としてあげられた自然に対する受容態度、目上・目下の人間関係、直感的把握、他律性の4つとも矛盾せず、したがって文献によって記述されている日本人の“中心的特性は非常に持続し、それは非常に変わりにくい”と結論している。つまり、長年にわたって、日本人の特性については同様なことが、繰り返され繰り返され取り上げられ続けられているのである。日本人論・日本文化論は時代により強調される点に違いはあっても、また論ずる立場の変化はあっても、論じられてきた日本人の中心的特性の内容に関しては大きく変わることがなく、これらの論の主張が、日本人の日本人集団自己概念を形成、保持するのに少なからぬ影響を与えてきたことは、想像に難くない。また、これらの書物のうちベストセラーとなって広く読まれたものも数多く、引き出されたキーワードは、集団主義、恥の文化、日本教、タテ社会、イエ社会、ムラ社会、ウチとソト、甘え、間人主義、家族主義、日本的経営、NOと言えない、など多数である。これらのキーワードは、いまや日本人を考えるときの常識とさえなっている観がある。

3-3 日本語と日本人らしさ——否定的集団自己概念との関係

明治以来、欧米の言語に対しての日本語の位置づけも、物質、生活様式、思考様式、価値観などと同じく、一段と低いもの、遅れたものとされてきた歴史が長い。この、日本語が不完全で劣った言語であるかどうかに関して、鈴木（1975）が“多くの人が明治以来日本語に向けた非難と否定的な評価は、実は日本語を全く性質の違うヨーロッパ先進諸国の言語、それも主として英独仏のみと比較し、これらの言語を理想的な言語の典型と思い込み、その観点から結論を引き出したために起こったことにすぎない”と述べているような相対主義的な見方が現在では強くなっており、日本語の名誉はかなり回復されているようである。しかし古くは明治初年、初代文部大臣森有礼の英語国語化論、第二次大戦後の志賀直哉の仏語国語化論などが提案されており、このような議論があったこと自体、背景には日本人の有識者の心の奥に潜む欧米語（英独仏語）に対する日本語の劣等感があったことをうかがわせるものであり、その伝統は今も持続されているように思われる。日本人自身の、日本語は難しい、日本語は論理的でない、日本語では世界に通用しない、等々との考え方には、まだ根強いものがある。西欧語が堪能な者に対する過度なまでの評価、衰えを知ら

ない英語ブームはその一つの現れと見ることができる。この調査でも「英語」ができないことに対する気おくれ、英語を勉強しなければならないことの不利について述べた者は123人15名あった。被験者が大学生であり、受験や大学で英語に悩まされてきたことの反映も大きいだろうが、この日本語否定、欧米語尊重の傾向は、大学生以外にも根強くあると考えられる。

筆者は、日本人の否定的日本人概念の形成に前述のような日本人論、日本文化論の影響の他に、この日本語についての日本人の意識が影響しており、さらに、日本語を使うことによって身につく、日々強化されている日本の心性（論理、感覚、価値観等）が大きく働いているのではないかと考える。特に、日本語と日本的論理・感覚・価値観等の内面的日本人らしさ（日本的心性）との関係は、切っても切り離せないものであると考えられる。以下、日本語と日本的心性との関係について論じてみたい。

3-4 言語に内在する感覚、思考様式、論理

各言語はその発生からの長い歴史の中で、その言語集団に暮らす人々の関心のある事物や考えを、その集団の人の感じ方ととらえて表現するのに適するように、語彙や文法、表現を発達させてきた。そしてそれは人々の意思を表現したり伝達したりするために日々使用されているうちに、その時代時代の人々の関心事や感覚を反映する形で、新たな語彙が作られたり文法が変わったりと、少しずつ変化をしている。このことは、金田一（1988）が述べているように、言語の形や表現方法を見ることによって、それを用いている人々の興味・関心の対象・考え方・生活感覚・価値観などがわかるということをも意味する。

サピア＝ウォーフの仮説で知られているように、各言語はその言語と重なる文化に内包される価値観・世界観を持っており、それぞれの言語を使用することによって人々のものの見方、考え方、さらに行動の仕方や態度は決定的に影響されるとする見解がある。「言語のちがいが、文化のちがいを規定し」、「異なった言語は根本的に異なった世界観をつくり出す」という考えである。荒木は同様の立場から“いったい言語は、その言語を保持する集団の世界観・価値体系を映し出す鏡である”と述べている（1980）。

外山は、各言語は、その言語を使う人々の論理をその中に含んだ形で成立しており、言語によってその内に持つ論理はそれぞれ異なるという（1987）。たとえば日本語の論理は点の論理でありまた多元論であるので、西欧の線の論理・一元論とかみ合わないことが多い。“日本語を西欧語に翻訳することが難しいのは、よく言われる

ように日本語が非論理的であるからではなく、各々の論理が異なるからであり、そもそもアントランスレータブルなのだ”としている（1976）。

箕浦（1984）は海外子女の文化体系の獲得に関する研究によって、思春期までを過ごした文化圏の文化がまず体系として個人の中に取り込まれることを明らかにしたが、ある言語集団に生まれてきてその言語を使用しながら成長する集団成員は、その集団の言語を身につけることによって、その集団全体の興味・関心の対象・考え方・生活感覚・価値観なども同時に学習していく。したがってある言語を身につけた個人は、その集団の興味・関心事を、その集団の論理の流れに沿って思考したり表現したりすることを、自然だと感ずるようになる。

使用言語によってその言語自体が持つ思考様式、論理様式が導入され、興味・関心の対象・考え方・生活感覚・価値観がかなりの程度規定される。そしてそれがその言語集団内の人々に伝達されるときには、単に同じ言語を使用するというもののほかに、同じ論理に基づいた思考や表現がなされるという理由により、その発語が理解されやすいのである。日本で育った日本人が日本語を違和感なく使いこなすことができるのは、日本語の習得と同時に、日本的思考・論理の習得が行われているからである。したがって、いったんそれぞれの母語を身につける過程でその言語圏の論理が身につけてしまった外国語としての日本語の話者は、母語の論理にもとづいて日本語を発話することが多いので、日本語そのものが堪能であっても何か不自然さが拭えず、日本語に堪能になればなるほど“変な外人”と見られやすい（ネウストブニー、J.V. 1982）、という結果になるのである。同様のことが、また日本語を母語とする人が外国語を話す場合にも言える。日本語を身につける過程で日本語の論理が身につけてしまった者にとって、いくら外国語を流暢に使いこなせるようになって、その語を母語とする人たちと全く同じような論理を組み立てることには、大なり小なりの困難が伴うと考えられるのである。

3-5 日本的心性と日本語

いま、これら日本人の生活に密着した生活感覚・興味関心事・思考内容・論理・価値観などを日本的心性と定義すると、以上のように、日本語を使用する人々の集団（現状はほぼ日本人と重なる）が共通して持っている生活に密着した生活感覚・興味関心事・思考内容・論理・価値観など日本的心性は、日本語に色濃く反映されている。日本的心性の形成は日本語を通じて学習する日本的思考・論理、価値観行動様式、などによってなされ、それらに基づいて形成された日本語を使うことによって、

それがまた強められ把持されて行く。この関係は、日本的心性が日本語の表現に反映し、その日本語がまた日本的心性を把持する役目を担うという、あざなえる縄の如きらせん構造になっていると考えることができる。ただし、生活様式や思考・論理や価値が、言語の持つ把持能力以上に急激に大きく変化すれば、言語の方が変化すると考えられるので、このことは言語は変化しないということの意味するものではない。その時代時代の日本的心性とは、らせん構造を維持しながらある一定の方向に移動をしていると考えるのがより適当だろう。このような構造を踏まえ、いま日本的心性を考えようとするとき、日本語の現在の姿からそれを把握しようとする試みはきわめて興味深いものである。前述した、日本語をうまく話すためには日本的心性が必要であり、日本語を使う限りは日本的心性から逃れられないということが、より明らかになると思われるからである。

3-6 日本語の姿

1. 日本語の位置

日本人の間にも日本語は難しい言語である、外国人には日本語の習得は大変難しいものである、と信じている人は多い。近年の外国人日本語学習者の増加で、日本語をうまく使いこなす外国人を目的にすることも多くなり、この見方も修正されつつあるように思えるが、しかしまだ日本語は特別に難しい言語であると考えられる人は多い。確かに、インドヨーロッパ語族に属する言語を話す人が、同じ語族の他言語を学習する場合と日本語を学習する場合とを比較すれば、まず表記の方法（文字）から始まって文法的体系などの違いなどによって学習初期の困難が大きいようである。しかしこれはインドヨーロッパ語族の言語を母語とする人から見ればということであって、日本語そのものが難しいということでは決してない。世界には4200～5600の言語があるといわれているが、その中で見れば日本語ばかりがひとり特異なのではなく、日本語に見られる特徴は他の言語にも見られることが多いところから、一般に言語学者は日本語非特異論に傾くという（金田一、1988）。言語の使用人口で見ると日本語の使用人口はほとんど日本国内に限られるが世界第6位であり、決して少ない方ではない。ただ、英語を中心とした西欧諸国の言語が支配的な状況において、国際間交渉等で使用される機会は少なく、日本語使用人口の多さ、日本の経済力の大きさに比べていささか影が薄い現状があり、日本語は難しい、日本語は特殊だという印象が、いまだ払拭されないままにあると言って良いだろう。

2. 日本語の形

① 音韻的特徴（日本人の音韻感覚と日本語）

アクセントは強弱でなく高低である。拍が単純である。単語は母音どめである。撥音、促音、長音も一拍とするモーラ構造、音素が少なく拍の種類が112と少ない、などが挙げられる。そのため文字（ひらがなカタカナ）で書き表すことはやさしいが同音異義語が多い。この特徴のために駄洒落や語呂合わせがしやすい。だるまさんがころんだ、グリコなどの言葉遊び、俳句、和歌など拍を基本とした詩歌が発達した。

② 統語的特徴（日本人の叙述形式と日本語）

文の構造面での分類は膠着語というカテゴリーに属しており、語順や活用など分の構造は英独仏などのインドヨーロッパ語族とは異なる。助詞が大きな働きをする、あまり細かい規則がなくどちらかと言えばおおよびである、などの特徴があり、そのため西欧語のために作られた文法やそれをもとにして日本で作られた学校文法等では日本語の仕組みはうまく説明できないことが多い。たとえば品詞分け、動詞の時制・態など西欧語文法の概念では説明しきれないが、これといった日本語文法もまだ確立されていない。

③ 語彙的特徴（日本人の興味関心と日本語）

語彙数の多さも日本語に特徴的なものである。理由としては生活文化が複雑であること。日本語には造語力があり新しい語彙を作りやすいこと。外来語などの多用と外国語の取り入れやすさ（漢語、カタカナ名詞、－スル、－ナ）などが挙げられる。

外国語の取り入れは盛んで、上代から中国からの外来語が絶えず入っており、近世、現代の西欧語からの外来語の多用、疑似外来語とも言えるカタカナ語の氾濫などでますます語彙数を多くしている。しかし語彙の面では外国語の影響は大きい、発音、文法など根本的なところではあまり影響を受けていないというのが、日本語への外国語の取り入れ方の特徴である。

また、語彙は必要なことを表現するために出来ていくのであるから、語彙の分布を見れば日本人がどの分野に関心を寄せていたか、関心を持たなかったかが分かる（金田一、1991）。自然に関する分野では気象・季節、地形・水勢などに関する語彙の多さと天体・鉱物の乏しさ、植物、虫、鳥などの多さが特徴的であるとされている。人間に関する分野では人体、生理、外傷、病気などに関する語彙には乏しく、動作描写も単純で語彙数は少ない。これに対して心理・感情を描写するための語彙は豊富である。生活関連の分野では農業の国、漁業の国であった歴史からこの分野の語彙は多いが、牧畜に関する語彙は西欧の狩猟牧畜社会に比して少ない。（たとえば

魚の名前であれば成長によって名を変えたり調理法などに関する語彙は多かったりするが、動物には英語に見るように雌雄、成仔で名を変えたり内臓にいちいち名を付けたりとすることはなく、本来のやまとことば由来の語彙ははらわた、きもぐらいである)。社会に関する分野では家、家族関係に関心が高く複雑な呼称の別があり、また、序列、身分の違い、年齢上下には敏感で語彙面でも区別があるが、男女の別に関してはは鷹揚で語彙による区別はないものが多い。社交の言葉（義理、贈答に関する語彙）には関心が高く、待遇表現が発達した。

④ 表現的特徴

④-①自己否定のニュアンス

たとえば日本語では言い切りを避けるために「であろう」の多用が見られ、かつては候文が愛用された。この直言、断言は避ける傾向は、言葉尻をのみこんでばかす「～ですが」の多用にも共通している。そこには誤解を生むことより相手の気持を傷つけることの方を恐れるという気持ちの方が強く、そのために自己の主張は控えめにし、自己否定のニュアンスを盛り込み、言葉尻をばかすという表現方法がとられるのである。この心理的特性が婉曲語法の発達、日本語の曖昧さを生むこととなったと考えられる。

④-②段落感覚の欠落

欧州語においては、ギリシャの時代からはじまり、多くの人を前に話すということが重要視されてきたという戸外語の性格を持つ。そのために話しことばを重視、話しことばの単位である段落ごとにまとめて、わかりやすく話す訓練、聞いたことをまとめて把握する訓練がなされてきた。それに対して東洋の言語は、書きことば・文字表現を重視してきた。文章は全体で一つのもをを表すものであり、段落の感覚はもともとないといわれる（外山、1976）。教育の中心は中世より最近まで一貫して「読み書きそろばん」であったということも、話し聞くことに対する関心よりも、読み書きに対する関心の方がずっと高かったことを示している。

④-③下方重心

物柔らかな前置きを好み、ズバリと要件のみを言うようなことは好まない。文章や話は「枕」、「下げ」や「落ち」の形式をとって組み立てられる。また動詞重視で語尾の大切なのが日本語である。終わりの動詞までは決定的なところは分からない。話芸や座談会の面白さは語尾の微妙なニュアンスにある。頭の大切な西欧語に対して、下方重心の日本語であるので、その形式をとって書かれたものは味わいがあると感じられやすい。要件を先に述べてから説明が続く新聞記事のような逆三角型の表現は、日本語としては無味乾燥な感じを与える。

④-④室内語的性質、独白的言語

日本語は、独白ないしはごく狭い範囲でのコミュニケーションに向いている言語であり、西欧語のような戸外での伝達や演説にはあまり向いていない。外山によると、日本語の独白的表現が発達したのは、日本人が情緒的であるからというより、日本語の室内的性格が独白的表現の発達をしからしめたからだという（1976）。もともと日本語は独白的言語であり、直接人に語りかける言葉に乏しい。一人称二人称の多様さも、独白の言葉として見ると説明がつく。これに対して対話時の一人称二人称の使用は不安定である。例えば相手に「あなた」というときには対立的な情緒的ニュアンスがあり、冷静な議論に使いにくい。適当な二人称がないので相手に直接呼びかけない。外山は日本人は議論が苦手といわれることに関して、「それは日本語が独白的情緒的表現が発達した、独り言を呟くにはめぐまれた言語であるが、議論に適した形式的言語の発達が不十分であることによる」と述べている。議論の際にも日常の情緒語を代用するしかなく、その結果議論内容よりも感情的対立が前に立つ。従って相手の感情を傷つけることを恐れる日本人は、議論になることを好まないというのである。

④-⑤日本のコミュニケーション

板坂は言語を将棋型と麻雀型の2つに分けると日本語は将棋型であるという（1976）。将棋は相手の出方（駒がどのように動くか）、手の内（どんな駒を持っているか）が分かるので、相手の出方の想像がある程度つくが、麻雀では相手の出方は容易に想像がつかない。麻雀型コミュニケーションは相手の手の内についての情報がほとんどないことを前提のコミュニケーションであり、互いが自己表出をすることにより互いを知り、そのうえで対処する。これに対して将棋型コミュニケーションは、相手の動き方のパターンを互いにある程度知っていることを前提とした上でのコミュニケーションである。

相手には論理立てた説得ではなく、相手と自分との関係を踏まえ、感情に訴えるコミュニケーション方法をとることが多い。言語以外の互いの態度や表情にも重きを置き、言葉は少なく、沈黙（余韻）を大切に言外の意味を伝えたり、またそれを察知することを大切に考える。とどのつまりは以心伝心、腹芸となる。

ホールの High-context-language, Low-context-language の分類において日本語が High-context-language とされるのも同じことを指してしている（1977）。そしてこの日本語の High-context 性が詩歌においては短歌、俳句という形式を発展させたもとにもなっているのである。

④-⑥自然傾斜, 感性的

日本語にはその語を使う日本人が自然に対して敏感なことを示す自然に関する語彙が豊富であるだけでなく、自然の事物を使った表現が豊富である。意味の上での自然傾斜としては、水に流す、風の便りなど自然の事物を使った比喩的表現は数え切れないほど多いことを挙げるができる。一方音声の上での自然傾斜は擬態語擬音語（オノマトペ）の高度な発達に裏付けられている。“ガアガア、カチカチ、バタンバタン、トントン、ポクポク”など音そのものを擬した表現、“サラサラ、ベタベタ、ヘラヘラ、ベコベコ”などの状態や動作・情景を表す表現の存在は、短くて的確な状況描写を可能にする。日本語においてはこれらの擬態語擬音語が発達しているので多くのジェスチャーを必要としない。

日本語には以上述べてきたような特徴があるが、そのことは、日本語を用いてコミュニケーションを行なうときには、以上の様な感覚を持ってコミュニケーションするとわかりやすい自然なコミュニケーションができるということでもある。自己表現が十分でない、曖昧である、婉曲的ではっきり言わないという日本型コミュニケーションに対する批判は、欧米型コミュニケーションに普遍的価値があるとする欧米中心の感覚の持ち主や、日本のコミュニケーションに慣れない外国人により繰り返さされており、これが實際上、日本人と外国人との交流の一つの障害になっているとの指摘もなされているが（モイヤー, 1987）、成長過程に於いて日本語とともに日本語の感覚を一旦身につけてしまった日本人にとっては、この感覚から離れることは容易ではないのである。

3-7 日本語の表現と日本人の思考・価値観

荒木は文化を、“行動様式・思考様式・価値体系の総体”と定義している。そして“特定の言語の特定の表現の隠された意味を探るためには、その特定の言語を使用している集団の世界観・価値体系を可能な限り掘り下げてみる必要がある”（荒木, 1980）として具体的な日本語の表現から日本人の行動様式、思考様式、価値体系についての考察をし、「日本文化と西欧文化の間にある劇的な違い」を明確な形で叙述している。そこで、日本の心性を生み出すもとである日本人の思考様式、価値体系、そして行動様式について、荒木（1980）をもとにしながら、また数多く出版されている日本人論よりの引用を用いながら、考察していく。

① 自然展開

「る」「らる」「れる」「られる」は自発、可能、受身、尊敬、の意味を持つが、この語がこの四つの意味を合わ

せ持つと言うことは自発、可能、受身、尊敬についてそもそも日本人はある共通の認識を持っていたということである。すなわち自然に起こること、可能だということ、何かかわが身に及ぶこと、尊敬すべき誰かが何らかの行動をすること、にはある共通した見方があるのである。その共通認識とは「自然展開」である。荒木によれば「主客合一の世界」である（1980）。自発、可能、受身から尊敬への連続は、尊敬すべきものとは、ことの自発的・自然展開的あり方そのものでなければならないという論理による。つまり自分に可能であるということは自然展開的に与えられるということと同根であり、尊敬すべき誰かの行動は必然的におこること、自然の成り行きの中で当然起こることと受けとめることでまた同根である。迷惑の受け身という日本語独特の表現があるが（e.g. 雨に降られた。母に死なれた）、そこにも同じことが見て取れる。動作主と客体（私）との対立は希薄で、受け身とはいいいながらその迷惑は天災地変のそれに近く、どうにも避けることのできない、ある意味での「自然展開」の中の事象ととらえている。

場所、状態、所有権の変化を表現するのに言語の2つのタイプがあり、それを「なる」の論理と「する」の論理とで説明した池上の論（1981）もまた、それまでに多くの論者が指摘した日本人の論理、「なる」で象徴される自発的・自然展開的思考をもとにしたものである。この論理は身の回りの出来事を誰かが意図的にしたというよりは自然展開的にそのようになったもの、必然的なものと受け取り、淡々とその現実を受け入れていき、原因や責任の所在をこと荒立てて追及することは潔しとしない、という態度につながる。

強制・禁止の日本語「なりません」「いけません」と感謝・謝罪の「すまない」にも共通の意味空間がある。それは「ある安定状態に達しない、安定的結果を得ない」という意味である。英語の must は対話者に対する発話者の側からの強制の心があるが、日本語の「なりません」「いけません」は本来、“強制の心は存在せず、あるものは、語り手の婉曲的触発によって、対話者を間接的に動かそうとする、極めて日本的な「自発」志向の心である”（荒木, 1980）のである。「すみません」について言えばその心は、このままでは自然の成り行きどおりではないので、このまま済ますことは出来ない→あってはならないこと、なのである。

② 宗教観・人間観

日本人の人間観は、西欧社会のもの（キリスト教的人間観）とは異質のものであることはまた多くの識者によって指摘されているところである。それは、神に対する考え方の違いと表裏一体をなしている。ベンダサンは

“古来日本人は仏教もキリスト教も受け入れはしたが本来の形ではなく日本流にアレンジした形でしか受け入れてはいない”（ベンダサン、1972）と述べている。今日のわれわれの宗教感覚では日本人は無宗教であると考えられることが多いが、ベンダサンによれば、それは無宗教ではなく「日本教」なのである。梅原（1976）など日本文化に仏教の影響を色濃く見る学者もあるが、筆者は仏教は知識階級のものから大きく出ず、庶民の生活に見る宗教観はいまま古来の神道に基づくものが支配的であるとする立場に組するものである。そもそも日本古来の原始宗教では信仰は家と所属集団から離れない。神様は鎮守の森の神様でありそれは自分と家と部落の守り神で、そこから外には関係しない神である。したがって世には“八百万の神”が存在し、したがって“神様、仏様、氏神様”と多数の神に祈ることは日本語では日本人においては、何ら矛盾しないのである。この点教キリスト教をはじめとする一神教とは、根本的に神に対する捉え方が異なる。神は日本人にとっては先祖の霊であり、普遍的絶対者としての神はない。普遍的な神がないから神のもとでの平等という意識もなく、他地方他国人他人種を同胞とは考えにくいのである。日本語における“ひと”はあくまでも自分となんらかの縁のある人のことであり、人類一般をあらわす語、人間、人類などの語は学問用語として造語されたもので、本来のやまとことばにはないのである。

また神は社にまつられているものであり、自己の心の中にあまねく神がありそれを良心とするという一神教的な考え方とは大いに異なる。この世で物事を行っていくのは人間であり、この意味では人間中心の世界観であるということができる。そして来世を信じず現世主義であり、「論理の根源はこの世の中にある。自分の生活圏で人と仲良く暮らし、繁栄するのが最上のしあわせ」という人生観を持つ。従って神に祈るのは“一家繁栄、家内安全、無病息災”などの現世利益が最重要のものとなるのである。このような感覚は、今も色濃くわれわれの日常の中に残っており、われわれの宗教観、人間観の基礎をなすと考えられる。

③ 個と共同体

多くの日本人論・日本文化論で触れられているように日本文化の鍵概念とされているのが集団論理性、それに基づく他律性、受身性である。ここでは具体的な日本語の表現からその表現の底に流れるこれら価値のあらわれを考える。

日本人の集団論理性は米づくりを生活の中心において来た長い間の日本人の生活形態から説明する試みも多くなされている。3、40年前までの農村で行われていた

ように、米作農家においては時機を失しないよう、また能率良く農作業を行うために、集落ごとに共同で田植え稲刈りなどをすることが古来行われてきた。また米作りにもっとも大切な水の確保のために、水の確保や水の配分のために集落中で力を合わせたりな話し合いをする必要があった。集落内の人々は互いによく知り合った家族的な社会を構成しており、互いに助けあうことが前提の社会であった。そのなかで皆と協調出来ない者は“村八分”になるが、それは米づくりが事実上不可能になることを意味し、生死に関わる恐ろしいことであった。そのために、協力忌避のレッテルをおそれて心にもない協力の形に入っていくようなこともしばしば起こったし、また集団全体の意向に従い主流からはずれないことを大事に考える傾向が強くなり、他律的、受身的な傾向が強められたと考えられる。このようにして、いつも集団中での保身を考え、いさかいをしないよう、相手の気持ちを思いやりながらうまくつきあっていく、ということが重要視される社会が形成されてきた。“和をもって尊しとなす”とし、人の輪からはずれないように“ひとなみ”“ひととおなじ”に価値を置くのである。日本における各種の集団はこのような伝統のもとに、共鳴心性が集団結束の支えになるという考えで運営されて来た。

このような社会で大切なのが“おたがいさま・おかげさま”の精神である。“おたがいさま”は互いの協力を引き出す言葉であり、互いに負担を感じさせないようにしながら協力し合うのである。また互いに協力しあっていることが前提であるので、何かの達成も決して自分ばかりの手柄にせず“おかげさま”と相手を立てるのである。

“世間体が悪い”、“世間様に顔向けが出来ない”というのも同じ気持ちからの言葉である。世間とは何らかの意味で自分と関係がある、および関係の生ずるであろう大勢の人々のことで、先の「ひと」と同一である。ごく身内とまったくの赤の他人をのぞいた残り全部が世間であり、義理関係の起こるのはこの世間内である。世間体とは世間の中の体面であり、世間体を重んずることは、世間の基準に同調するということである。この世間の中でマイナスの評価をされるのが気になるからである。

古い農村型社会では上記のように回りの人々の機嫌を損なわないように気を使いながら良い評価をされるように気をつけ、人間関係を良好に保つ努力をする。そのためには他人により印象を与えることが重要なことになるので、常に人のことを気かけ、自己の言動が他人にどのように受け取られるかを吟味することが行われてきた。西欧人から不可思議な笑いといわれる日本人の微笑も相手に敵意を抱いていないということを知らせるための対

人的な方策の一つと解釈され得る。

日本人の他人を気にするこの心的傾向は言語体系にも深く入り込み、相手の気持ちを考えて丁寧に、また婉曲な表現が発達した。中でも相手の気に障らないように気を配るために、相手を押し上げ、自分を押し下げる表現、敬語、謙讓語、丁寧に語などのいわゆる待遇表現が、高度に発達したのである。

しつけのかたちも他律的である。善悪判断は周りの人の思惑がどうかということによってなされるので、“しかられますよ”“わられますよ”と人目を気にせよという意味のしつけの言葉が多い。他人にどのように思われるかが自分の行為を律する基準となるからである。

これは、キリスト教社会の倫理とよく対比される。古くはベネディクト（1973）がキリスト教世界の罪の文化（guilt culture）に対して日本社会の恥の文化（shame culture）と呼んだことによって世に知られることになった。築島（1977）は、キリスト教社会では唯一絶対者として神をとらえ、良心を個人の心内における神の声と考え、論理・良心にしたがってことを処理することが心理的主流をなす社会であると言う。神に導かれた自由な個人が前提としてあり、善悪判断は他からの強制があってはならないのである。この点からも西欧人の個の強さが、そしてそれに対比したときの、日本人の個の弱さ、他律性が説明できる。

“顔で笑って心で泣く”という行動様式も人を気にすることと、また同時に自己の属する集団内に、共通の理解があることを前提に生まれた繊細なコミュニケーションとすることができる。たとえいくら悲しくても、相手によけいな気を使わせまいと、大丈夫ですよという表情や素振りをしてみせる。そして相手は心と表情が不一致でも、そのけなげな態度の中に真意を察し、その心を理解するのである。本来日本では悲しいときにも嬉しいときにも、回りの人々を思いやって、感情の表現は控え目にするのがつつましく、価値の高いことである。ことばを使わなくても互いに分かり合えることを前提にしたこのような伝統が、逆にみると感情表現が不得意で、思ったことがなかなかことばに出せない日本人を作り上げて来たと言えるだろう。

日本人の好きな“ケースバイケース”は日本人の法意識、契約についての感覚を物語ることばである。互いに分かり合った仲での信頼感を大切に社会においては文書による契約は“水くさい”ことであるし、たとえ契約があっても拘り定規な実行はまた水くさい。互いを思いやって相手が困らないようにするのが人の道であり、相手の信頼に応えないことは恥であるからできないのである。契約や法に縛られての行為は、賞賛されるべきこ

とでも何でもないのである。そのようなものがなくても信頼に応えることが、価値があるのである。またそのときどきの状況に応じてケースバイケース、と原則を曲げることは責められることではないし、むしろ大岡裁判のような、原則を曲げて人の立場や心を理解した上での法の実行が賞賛されるのである。

前述のように日本人のコミュニケーションでは、将棋のように相手の出方がある程度わかる、予測がつくということをも前提にしているから、いちいち細かいことまで説明することはしない。“常識だろう”“分かっているはず”というところが大きい。こと細かな説明は、する側には“そこまでいわなきゃ分からないのか”と思わせ、聞く側には“くどい”と思わせる。言わなくても分かるのが「賢い人」と賞賛され、“ツーと言えばカー”の間柄が理想とされるのである。

自己表現は常に謙虚をよしとする。相手に良い印象を与えるように謙虚に控え目に表現するのであるが、それは相手の出方の予測のつく日本語集団という集団内では、相手は決して自分のことば通りには受け取らず、正当な評価をしてもらえないはずだ、という確信があつたことである。

相手への配慮のある表現は、自然な日本語を話すことの重要なポイントである。出来るだけ相手に負担をかけないように、出来るだけ相手の気持ちを損なわないように、いつも相手の気持ちを思いやるのが、日本語をうまく話すためには必要で、またそれが自然な表現である。例えば、“お茶が入りました”は相手に心理的負担をかけないように、私が入れた、私がこれを与えるという言い方をしない配慮がされている。“つまらないものですがご笑納ください”も負担を感じないでくださいという同じ心であるが、これもやはり、分かり合った集団の中で正当な評価がしてもらえたとの確信があるからこそ、できる表現である。

また、自分に落ち度がなくてもまず謝るというのも、相手との信頼感の上に、相手の気持ちを損なわないようにという配慮が働くからである。こちらが“すみません”といえれば必ず相手は“いいえこちらこそ”と応じてくれるという信頼感が、何かあったらまず謝罪のことばを言わせるのである。“力が及びませんで、”も“いたりませんで”も同じである。そう言ってもことば通りに受け取られるようなことはないという確信のもとに、どちらもが落ち度を認める言葉を発し腰を低くすることで、相手との関係を損なわず保っていこうとするのである。

日本語の質問に対する返事“はい”“いいえ”が、質問を発した人の考えていることを肯定するのか否定するのかという、相手の立場から考えた返事になっているこ

とも日本人のこの考え方を示すものである。

4 結論

以上に見てきたように、日本語の形、日本語の表現の中にわれわれは日本人の心性を随所に認めることができる。日本語を使って生活している限り、われわれは上に述べたような、日本語の感覚—日本語の表現の中に見られる自然展開的思考、日本教といわれるような宗教観・人間観、日本社会の共同体意識の強さから引き出された集団論理性、他律性、受身性、相手への配慮など、日本人の心の奥深くに深くに根づいている心性からは離れることは出来ない。また日本語を使うことによって、その日本的な心性は日々再確認され、定着していくのである。さらに言えば、これらの感覚が身についていないと日本語表現の真の意味は分からないし、日本語を的確に使うこともできない。

われわれ、日本語を母語として生育した日本人は、これらの日本語の感覚を言語獲得の段階でしっかりと身につけており、さらに日々の生活の中で日本語を使用するたびに強化している。一旦身についたこれらの感覚は、意識して捨てようとしても、そう簡単には捨てることができない。

しかるに昨今では、国際社会に対応するための必要性もあり、欧米流の考えに基づく行動型やコミュニケーションの型が価値の高いものとされやすく、教育現場でも社会でも目標として掲げられることが多い。他人に影響されない自分の意見を持つこと、自己主張ができること、自主的に行動すること、自律性を養うこと、などなどである。このような欧米的な行動型やコミュニケーション型は、日本語を身につける過程で形成された日本の行動型やコミュニケーション型とは大いに矛盾するところがある。かくして日本語とともに日本的な行動型やコミュニケーションの型を身につけた者にとっては、この欧米流の価値観の蔓延は、大変重いものとなる。そしてその風土の中で、これまでに日本語を身につける段階で培われて来た自己の中の日本人の特性を認知することは、畢竟否定的な自己概念を、そして否定的な日本人集団自己概念を形成させることになるのではないだろうか。

これまで述べてきたように、長い日本の歴史の中ではぐくまれて来た日本的な心性は、相互の信頼感にもとづき、互いを思いやる心に満ちた、高い評価を受けるべき一つの文化である。日本語を使う限りついて来るこの日本的な感覚、そしてそこから培われた日本的な心性を、我々の文化として肯定的に評価する土壌がない限りは、国際化時代の一人一人の日本人の自己概念も、また日本人集団自己概念も、決して肯定的なものにはならないのでは

ないだろうか。

引用文献

- 青木 保 1990 「日本文化論」の変容—戦後日本の文化とアイデンティティ— 中央公論社
- 青木富貴子 1988 たまらなく日本人 文芸春秋
- 荒木博之 1980 日本語から日本人を考える 朝日新聞社
- ルース・ベネディクト 1973 文化の型 米山俊直訳 社会思想社
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527
- Hall, E. t. 1977 *Beyond Culture*, Garden City, New York: Anchor Press/Doubleday
- 板坂 元 1976 表現から見た日本文化 鈴木孝夫編 日本語の語彙と表現 299-320 大修館書店
- 池上嘉彦 1981 「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論— 大修館
- イザヤ・ベンダサン 1972 日本教について 山本七平訳
- 金田一春彦 1988 日本語(上)(下) 岩波書店
- 金田一春彦 1991 日本語の特質 日本放送出版協会
- 箕浦康子 1984 子どもの異文化体験 人格形成過程の心理人類学的研究 思索社
- モイヤー康子 1987 心理ストレスの要因と対処の仕方: 在日留学生の場合 異文化間教育 1, 81-97
- ネウストブニー, J. V. 1982 外国人とのコミュニケーション 岩波書店
- 越智道雄 1994 「アメリカ人の母国追想への絶え間ない思い」CAT(8) アルク
- 大野 晋(編) 1987 日本語の本性 日本人の心のウチとソト 現代のエスプリ 至文堂
- 鈴木孝夫 1975 ことばと社会 中央公論社
- 外山滋比古 1976 日本語の個性 中公新書
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
- 築島謙三 1977 日本人を考える 現代心理学ブックス 大日本図書
- 築島謙三 1984 「日本人論」の中の日本人 民族の核心を知る 大日本図書
- 梅原 猛 1976 日本文化論 講談社

(1997年9月16日 受稿)

ABSTRACT

Japanese Awareness and Japanese Language

Saiko HAYASHI

The purpose of the present study is to examine what is the Japanese youth's Japanese awareness like and to discuss from where the awareness have come. University students were asked to answer the questionnaire, consisted with mainly open-ended questions. 123 data were analyzed. As the result of the survey, it was found that although Japanese university students were pleased with being a Japanese citizen, they have negative feeling about being a Japanese about the outlook and the mentality as well.

Japanese mentality was described with reference to Japanese culture. And the helical structure of Japanese language and Japanese mentality (feelings, thinkings, logics, sence of value, etc.) was discussed.

Because Japanese-speaking-people have acquired their Japanese mentality in the process of learning in their growing process and using Japanese language in everyday life, it is not easy to change their mentality in a short time even though they want to do so.

In the atmosphere where the westerner communication style and logics are supposed to be the best, most of Japanese tend to make up their negative group-selfconcept as a natural consequence. It is suggested that for making up the positive feeling of being a Japanese and make their self-concept positive, the important thing for Japanese is to regard their own mentality itself the valuable culture to the same extent as western cultures'.

Key words: Japanese awareness, Japanese mentality, Japanese language, logics, self-concept